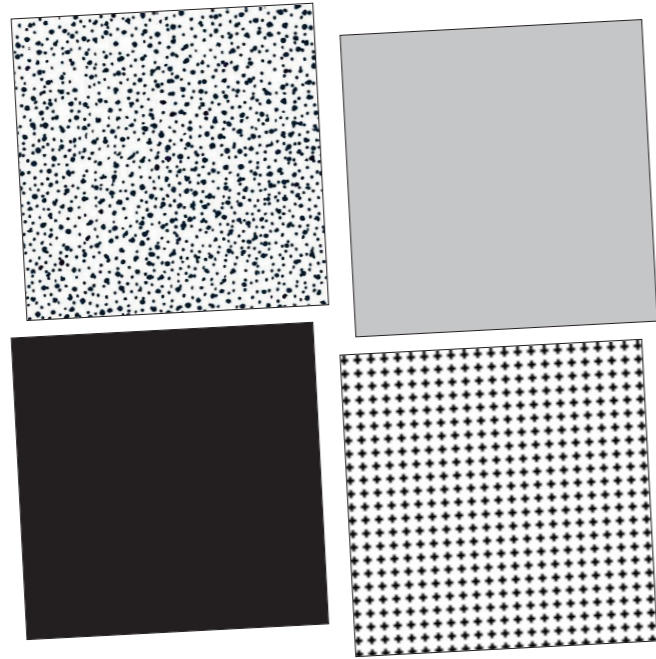

月 刊

MéLange

Vol.152



2020.06.28

詩と評論

月刊「Mélange」

Vol.152.2020.06.28

「月刊めらんじゅ」編集部

詩

葉っぱが枝から離れるように ……木澤豊 3
 靴詠+ 鉦物詠 (俳句) ……岩脇リーベル豊美 9
 エイプリルフル+エクリ20200309句歌詩 ……野口裕 10
 エイプリルフル ……野口裕 11
 兆し ……中嶋康雄 12
 島のわたし ……黒田ナオ 13
 ぐみ ……月村香 14
 《LA VIE EN ROSE》 ……にしもとめぐみ 15
 花と電車 ……田村周平 16
 地平の寝覚め—みとろ荘にて ……高谷和幸 17
 夢の続き ……前田雅正 17
 わけなく ……大橋愛由等 18
 兆しへ進む ……大西隆志 19

連載小説

4回目+5回目 / 「カフカ教団」 ……高木敏克 4

連載エッセイ

「アメリカ南部に暮らして⑧」 ……モス堀淵敬子 6
 新連載 〈本のひと皿〉「みんなの極私的スーパーフード・ピーナッツバター」 ……安城位久緒 7
 「益田っこ通信 No.42+ No.44」 ……元正章 8
 神戸詞あしび 141 「過ぎざる季節を惜しむなかれすべての花花よ」 ……大橋愛由等 20

編集部日より★72 / 三月から休会していた「Mélange」例会。六月は四カ月ぶりの開催となる。休会の理由は、新型コロナウイルスの蔓延によって社会活動は大幅に制限され、自粛が要請されて、ひとびとの動きがとまってしまったのである。四月、五月の二か月間、わたしは仕事の都合でほぼ毎日電車に乗り、神戸の都心である三宮に向いていった。その時跋扈した言葉に「不要不急」がある。必要のない外出を自制することで、感染の拡大を防止する目的なのだが、言葉は独り歩きしていく。各人によって「不要不急」の尺度はちがうはずなのに、自分なりに思い込みで拡大解釈していく。わたしの住む地域の公園は日中、子どもたちや保護者、ママ友らで賑わっていたが、同じ神戸市内でも公園に向く人が少ない地域もあった。住民が監視しているのである。「自粛警察」となった住民は、自粛をしないひと、営業をつづけるパチンコ店、飲食店に狙いを定めて、さまざまな手段で抗議して正義の味方のつもりでいる。非常事態宣言が終息してのちも、あらたな社会のひずみが生まれる。感染防止のためにまたたくまに広がってしまったソーシャル・ディスタンス(社会的距離)。マス媒体はさかんにポストコロナにおける新しい社会慣習のひとつと位置づけたがっている。しかし住民の受容の仕方は異なる。たとえば電車の中。近くに外国人(非西洋系)が座るとさっと席を立ってしまうひと、なんとなくうさんくさいと認めた他者が横に座ると席を変ってしまうひと。いずれもポストコロナで見かける車内光景となった。避けられた人たちはコロナ感染者かどうかは問題ではない。すこしでも自分が異者であると認めたらすぐその場を離れる。予備的にひととひととの距離をとろうとする心情がこうした車内での光景を産んでいるのである。 / 今月の読書会の講師は、彫刻家の用澤修氏。わたしの小学校・中学校の同級生である。(大橋愛由等記)

◆葉っぱが枝から離れるように

木澤豊

ふっ

海のほうから 救急車のサイレンがきこえて
 影は 岸壁沿いの倉庫の扉に消えた
 葉っぱが枝から離れるのに似ていた

大きな記号が描かれた扉は閉まったまま
 静かだった

大きな鞆をさげて

(いや 引っ張って だったかもしれない)
 「きょう 帰ります」つて
 とつぜん 出かける夢で起きた
 鞆のおもてが 剥がれかけていたつけ

とおくで

ド ト トトトト

焼き玉エンジンが始動した
 もう 出るんだな

(葉っぱが枝から離れるように
 影は分厚く大きな木扉に溶けた)

夢じゃない

川は すこし ドブの匂いがした

都市 歳かね

八三歳さ ね

この世と

戒名二つあつてさ

(あいつ 湾の奥の坂から 見下ろしていた
 誰にも見えないつもりして)

サザエとアワビの殻が

狭い庭で 少し光った

二階の窓から わたし

じぶんの宝を 見た

それ

見慣れたわたらしい

いや さようなら言うひまもない

岸壁の水たまりに 虹いろに

油が浮いていた

そらいふ われら

街のおとが

しずかに ゆふがた だな

カフカ教団 ④ 高木敏克

サングラスを外した女は僕の顔を黙ってしばらく見ていた。どうしたんだろう。二人はどこかで出会っているのだろうか。お互いに何かを忘れて見つめあつてしまった。

「どうしたの、お知り合いなの？」とママに聞かれても思い出せない。彼女が会釈して二階の階段に向かうと、「じゃあ、一目惚れでもしたの？」と意地悪く聞かれた。僕は一目惚れというのは忘れていた何かを思い出すことももしれないと思った。一応「まさか」といったが、女がサングラスをわざわざ外したのは「覚えていてでしょ」と言っているように思えた。

街角の隅々がオイルで黒ずんで見えるのは運河のせいかもしれない。道はせまく猫が車の屋根を踏んで通り過ぎていった。そのくせ、喫茶店カフカの建物は中庭がやたらと広くそこに車が中に入りすぎて出られなくなったのを見た。中庭のもう一つの出入り口は運河の船着き場になっていたので行き止まりだった。

アパートの入り口は喫茶店の大きなドアの左側にあった。ドアを開けるといきなり上り階段と下り階段が現れた。そのために入り口に入った人間が上の階に行くのか下の階に行くのか、あるいは喫茶店に入れるのか分からなかった。

次の日の午後、僕がカフカ研究所の看板を持ってドアを開こうとした時のことであつた。いきなりドアが開いた。おどろいた女が目がじつとわたしを見ていて離れない。そこまで驚かせてすまないと思つたがあまり理由はないと思つて女の顔を奥までのぞいてしまった。

「タカギさんでしょ。喫茶店のママから聞いているわ。でも、あなたはママから何も聞いていない。あなたか借りることになった地下室というのは私の部屋だつたつて聞いています？」

「僕は二階の部屋を借りたかつたんだけど、もう入居者が決まっているから地下なら空いているということ借りることになったん

だけだ」

「じゃあ、あなたは二階も使えることにしたら。そのかわり、わたしもあなたの部屋を使うから」

地下室への階段が下に続いている。女は長い髪の毛を額からかき上げて大きな目で何度か私を見上げて「わたしって勘がいいのよ」と言つた。女の匂いがふくらんだ。僕は彼女の脇腹に手を回して肉をつかんだ。「あなたも勘がいいのね」と言われて、ストリートにしか話ができなくなった。

「する？」ときいて「いますぐする？」といいなおした。「ええ」ときこえたので僕は彼女の首筋にキスをして腰を抱いたまま斜めになつて階段を降りていった。女の匂いは薄闇に漂つて沈んでいった。壁がオレンジの電灯に照らされていたがもう一つ水平に差しもむ光があつた。

僕を突き放すと女は唇を少し開くとその光に舌が見えた。

「ずっと見ていたのよ。帰りを待っていたわ」と女が言つた。自分の匂いが浮くのがわかつた。女はそれを吸いとりうとしていた。「どこから見ていたの？」と聞くと、「二階の窓からよ」と女は笑つた。

「じゃあ、二階に行こう。二階の眺めを確かめよう」

「なんだか、初めてあつた気がしないね」

「そうね。ずっと待っていた気がするもの。あの運河には暗闇が流れていたでしょ。だからこの部屋は地下室に見えるけど、夜になつて、街全体が闇に沈むと、ほら本当の川面が見えてきたでしょ。すると、この部屋が昔は一階だということが分かるわ」と、女は闇を見ながら盲人のように喋つた。

どこか似ている男と女の匂いがまじりあつて奇妙なほほえみで二人はかさなつた。女を包みながらその奥で女に包まれていた。窓の外では夕日をつけて河の流れが時間を喰つてゆく。穴という穴がわたしを沈めようとしている。運河にはいつも同じ水が流れているように見える。

カフカ教団 ⑤ 高木敏克

次の朝、わたしの勤務先の倉庫会社「三幸商会」の入り口には見なれない三人の男が立っていた。誰かを迎えるために立っているのだろう。ぴつちりとしたダークスーツはおそろいで、ネクタイの締め上げ具合からすると相当の地位の人がやつてくると思えた。ただ一人だけ長髪の男がいて、ファッションモデルと見える長身で、この辺りにはいないタイプだった。近づくとも誰かが視線をそらせて自然にわたしを無視しようとする態度をとつた。こちらはもつと相手を無視するように邪魔だなどという態度で通り過ぎた。

事務所に入り机に座るとすぐに電話がかかつてきた。電話メモを読み返し古い順から返事しなければならぬのに、一番遅い相手と話すことになつたので、投げやりな声で話しを受けた。

「ご友人だとおっしゃる方からのお電話です。中村さまとおっしゃっています」

「中村はたくさんいるな。下の名前は聞いてないの」

「中村と言えばわかると、おっしゃるので聞いていません」

「会社の名前は・まあいいからつないで」

「あ、もしもし、タカギさんですよ。大阪府警のナカムラと申し

ます」

「そんな友達はいませんが、友達とおっしゃいましたよね」

「すみません。捜査第一課とは言えませんがね」

「言つたも同然です。この電話は録音されています」

「じゃあ、掛け直します」

「余計に困ります。用件は」

おそろく、わたしのことは調べがついている。会つたほうが話は早い。最初に言うべきことは決まっている。

「お会いしますけど、条件があります。一回限りならお会いできません。それから、わたしの私生活についてはお話できません。よろしいか」

「はいわかりました。少しお聞きしたいことがあります。あなたのことは何も聞きません。お近くの喫茶店カフカでお待ちしています」

「でも、空いていますか。誰かいたら何も話しませんよ」

「はい、今は誰もいません。さすがに用心深いですね。昔から何も変わっていない」

みんなの極私的スーパーフード、ピーナツバター

安城 位久緒 / Anjo Ikuo

私が住んでいたノースカロライナ州は、アメリカ南東部にあって、一番大きな都市のシャーロットにも日本からの直行便もなく、言うなれば日本から一番遠いアメリカかもしれません。
彼らにとつてはアジアは遠く、日本も中国も韓国も区別がつかないと思われまます。
ある日中学生くらいの男の子に「Where are you from?」

婦から「三島由紀夫はどうして自殺したんだ?」ときかれ、「へっ?」となつてしまいました。
日本も中国も一緒くたにするアメリカ人からこんな質問をされるとは思いませんでした。
彼が割腹自殺した時私は中学生でした。このニュースはよく覚えていますが、なぜ自殺したかははっきりわかりませんでした。そのため彼らの質問には答えられませんでした。(日本語でも答えられなかったでしょう。)

〈アメリカ南部に暮らして〉

⑧ モス堀渕敬子

ときかれて「I am from Japan.」と答え、念を押す為に「I am a Japanese.」も付け加えました。
しかし、しばらくたつとその男の子は、「それじゃ中国から旅して来たんだね」と言われて、ガクツとききました。
そうかと思えばこんな事もありました。
あるパーティーの席で、30代後半ぐらいのアメリカ人夫

つてくれました。記事には「Team」とあったので、彼が日本の再軍備を望んでいたのはわかりましたが、それがなぜ自殺する必要があったのか。政府に抗議するためだったのでしようか?
とにかく、日本に対する認識に関して、両極端な経験をしたしだいです。

日本にいる友だちに尋ねると、彼女は英字新聞の記事を送

「ピーナツバター」は、魔法の言葉かもしれない。文字をみたり耳にするだけで、シンプルで、どこかノスタルジックな味わい、お腹が満たされ心やすらぐ感覚がよみがえる人は多い。

ペンポイントに強力な呪文もある。PB&J。ピーナツバターとジェリーのサンドイッチである。ジェリーは、ゼラチンで固めたスイーツの「ゼリー」ではなく、果汁から作るジャムだ。果肉を残さないぶんジャムより透きとおつて軽く、なめらかにしあがる。ピーナツバターの香ばしく滲みでる甘み、ねとりした触感と、好相性に甘酸っぱい。お弁当箱におにぎりをつめる遊び歌が日本にあるように、アメリカ人や英語を学ぶ世界中の子どもは、PB&Jの童謡を手真似して歌う。学校でのランチや、家で手早く虫押さえする軽食の定番なのだ。

好みのジャムで作るPB&Jも美味しいけれど、葡萄のジェリーが別格。不動の名脇役といえる。片岡義男は、エッセイ「ピーナツバターで始める朝」によると、入手困難になつたグレープ・ジェリーに代えて、フランス製コンフィ・ドゥ・ヴァン(ワインのコンフィチュール、ワインジャム)を手に入れたらしい。赤いメルローだけでなく、白いマスカットやソーヴィニヨンのコンフィまで。カジュアルでいて上等な革ジャケットのようなPB&Jではないか。

ピーナツバターは、応用をどうしり受け入れる。調味料として、ドレッシングやタレにして野菜や肉を和えたり、お菓子や飲物の風味づけにするレシピも、世界には数多い。瓶詰めだと保存がきくから、「ステイホーム」の昨今なおさら頼もしい。

懐ふかい個性派の面目躍如なのが、バナナとペーコンに組み合わせるサンドイッチだろう。エルビス・プレスリーの好物だけに、「エルビス」として知られる。ロックンロールの王様には、おふくろの味でもあった。スターの重荷をひととき忘れ、ほつと元気になれたはずだ。少年がピーナツバター・サンドを持つて釣りにでかけ、妖精風の宇宙人と交流する、ロバート・F・ヤングのSF短編「ピーナツバター作戦」の洗いざらした木綿の純朴さは、濃厚なエルビス・サンドにもどこか、潜んでいる。

知的で繊細なビートニクとニューヨークパンク風味のピーナツバターも、テーブルに並べてみよう。インディ系の新世代フェミニストが「現代詩のロックスター」とリスベクトする、ベテラン米国詩人、アイリーン・マイルズの「ピーナツバター」。詩の語り手「わたし」は冒頭から、「いつだつて空腹だし／セックスしたい／それが事実」と、あけすけだ。「変化は天敵」で、近頃の自然派ピーナツバターはいけすかない、大手スーパーでいつもの瓶入りを選ぶべきだと言いながら、実は、あらがえない時の流れから光が射して、人生が新たに美しく見えるのを、まぶしく受け入れてもいる。長年の恋人に白髪をみつけ、改めて魅力にノックアウトされているという、今この時の愛の告白が、遠い夏の記憶や、死後のビジョンに交差する。甘すぎず薄っすら塩のきいた抒情が、性、国境、世代を超えて響く。

ピーナツバターは、思い出と希望でできている。瓶からスプーンですくいとり、ストレートに味わうだけでいい。

◆益田つこ通信

はじめ
元正章

▼42号／「世のなか 安穏なれ」 〈2020.05〉

「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうち生存する権利を有することを確認する」。この文言は、実に我が国の憲法の前文にある。「全世界の国民が」と表すところに、自国第一主義を超えた普遍性を感じて、誇りとする。今回のコロナ禍を通して、私たちは何を経験し、そこから何を学ぶのかをじっくりと考えなければいけない。でなければ、なんのための自粛・制限であり、経済優先よりも「いのちの大切さ」なのかが意味をなさない。

「迷信の根拠は、我慢我愛のころであり、(中略)実は我を押ししているのである」(三木清)。自分は我慢しているから、正しいというのは、それこそが迷信の根拠ともなっているのではなからうか。芥川の『蜘蛛の糸』の主人公のように、「こら、罪人ども！」と、県境を越えて来る人に対して叫んではいないだろうか？自分中心の生き方に囚われている限り、世の中に平穏があるはずはない。そもそも数字でもって「いのちの尊さ」を計ろうとすること自体が、科学(人間の叡智)の傲慢なのだ。科学の発展は同時に、疫病の進化・変異を伴うものではないかと、ふと思わないでもない。新型コロナウイルスの突如の出現は、何を意味しているのだろうか、何を示そうとしているのだろうか。そのことを深く考慮することなくして、「いのちのバトンタッチ」を次の世代に受け渡すことなど、恥ずかしくできない。

『世のなか 安穏なれ』(高史明著 平凡社 2006年刊)の読後感

◆益田つこ通信

はじめ
元正章

▼44号／「心だにまことあらば」 〈2020.06〉

「個人には所詮どうすることもできぬ運命と無常……。にも拘わらず総体としての人類の歴史には世界的理性が貫かれ、個々の歴史的事件はいかに不幸で不合理なものであっても、それは世界精神の合目的な発露なのだ」と、僕は信ずる(『邪宗門』高橋和己著)。この一節は、死地に向かう特攻隊員の若き妻に言い伝えた遺言である。コロナ禍によるいたずらなる出会いで、約半世紀ぶりに『邪宗門』と向き合うこととなった。思弁的な言辞の海にすつかりはまり込んでいた当時の面影は、今も心の底には残滓となつて埋もれているのであつて、古傷を探るような気持ちで読書していた。「心だにまことあらば」という言葉に触れたとき、思わず瞠目してしまった。一瞬であれ、「〇余年の人生をどう生きてきたのかと、来し方を振り返つてみた。

ここ数か月、もの皆がコロナ禍一色に覆われている。緊急事態宣言が解除されようと、それでもつて出口が見えたわけでも、「その後」に希望が見出されるわけでもない。思い煩いはどこまでもつきまとつていく。しかし、である。「思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけていくださるからです」(ペトロの手紙1:5)。世界的理性(世界精神)とは、神と置き換えてもいいだろう。生活や将来の不安は考えれば考えるほどに増していくかもしれないが、「心だにまことあらば」と念じていけば、必ずや道は開かれよう。試練とは超えるためにあるのだから。

夕食後、日課となつた益田川のほとりの散歩中、ホタルを見た。

(編集部註／この「益田つこ通信」は、島根県益田市にある日本基督教団益田教会の牧師である元正章氏が月間で発信しているハガキ通信を転載したものです)

岩脇リーベル豊美

◆靴 詠

革靴と大陸の最要注意人物
思想変質より深層に入る安全靴
境界を喪失する感染症と靴擦れ
独房の彼方に靴音の執行日
雨靴に橋すら流す濁りみず
八重葎辿り着かずと靴の所為
海人の靴は夜更けに陽に向かう
紐結びなおす児のはじめての赤い靴
パンプスの踵折れるたび踊り場
声音の射程に残る白い靴

◆鉈物 詠

無口なる鉈物に深爪の癒え
劈開の美学水晶庭園にかくれんぼ
石英や世界は石でできている
ブラジル産無色六角玻璃に花菖蒲
水晶窟籠るフロイライン青き月
石売りは飛礫をパラフィン紙に包む
夕焼けの帰り路鉄棒にぶら下がる肉塊
墓石増すエトピリカたちの寄る島に
洞窟の鬼女伝説の外出禁止令
サファイアとトパーズの都の来歴
石塊はこれ君？と喋り出さずに
数学者ルネの鉈物のなみだ

◆エクリ20200309句歌詩

野口 裕

おりに触れての閑吟集

なんとなく雲を見上げる
なんとなく口をつく閑吟集
人買舟は沖を漕ぐ とても売らるる身を
ただ静かに漕げよ 船頭殿

どこにでも沖はあり
沖があれば人買舟があり
どこまでも金はついて回る

ビットコインのアイデアを発表した
サトシ・ナカモトなる人物は
この10年とんと姿を現さないそうなの

あいつじゃないかという人がいれば
いやそうじゃない
死んだんじゃないかという人がいて
いやそうじゃない
実は俺なんだという人もいて
とんと雲をつかむような話

さて もうひとつの閑吟集に戻ろうか
何せうぞ くすんで
一期は夢よ ただ狂へ

早春四句

偶感四首

風光る土地の名プラスラーメン屋

駅前の自由ピアノが演奏中ジョン・ケージ
作四分三十三秒

啓蟄やブラックホール毛が三本

消しゴムの削りカスほど春の雲どこかを消
した何か見上げる

マスク取れば六連餃子皿に乗る

空中の電線にあるT字路を曲がる信号弔電
運ぶ

去勢果て風葬未だ肉の指

ぶつぶつり服地に路に痕残し特段の喩はな
く霰溶け去る

◆エイプリル fools

野口 裕

遺伝子の変異が四つあるというそりや人工だろう なじかは知らねど

まぼろしのコウモリ市場存在せずと述べた人がまぼろしとなる

骨壺の数より少ない死者の数余った壺に味噌でも入るか

春風邪がロシアアンルーレットとは知らずマスクの中で小さな嘔

手回しの鉛筆削り器逆回しすると伸び元の鉛筆

神は死んだとウイルスが呵呵の声

祈りをそれに捧げつつ

さておそなえをどうしよう

ドラキュラ殿はどのようにお考えか

あれ：

聞いてない振りかいな

春の星乗り過ぎたら無人駅

白猫のやや黄味帯びて暮れかぬる

水ぬるむその裏面を搔けないか

夜桜や花びらはみな顔である

虹受けて力を開く紫木蓮

◆兆し

中嶋康雄

外になんか出たくない
うじゃうじゃ浮かんでいるから
人なんか会いたくない
うじゃうじゃ吐き出しているから
いつまでか
まことしやかにささやかれ
その正しくあることのかりそめが
べらべら身にしみて
いまさら
もうそろそろだといわれても
いわれればいわれるほどに
離れてほしい
離れて

ハエが空中で止まっている
たれ流される
わからなさのはざまに
漂っている息のほんとうは
どのくらいだろう
外になんか出たくない
うつむいたまま暮らしたい
だまつたまま暮らしたい
つごうがいいわからなさを
ゆるす人だけよろこんでいる
縮んだ夜がまたのさばりはじめ
すきますきまに気配の残る
あわせもたれるまとはずれ
外になんか出たくない
籠もってアイスクリームでも
食べてそのまま一緒に溶けて
べたべた眠りたい
うるさい
さわるな
もやもやあかるい

◆島のわたし

黒田ナオ

見下ろすと
すーっと金色の魚が泳いで来て
気がつくのと、わたしも一緒に泳いでいた
そのうちだんだん体が透き通ってきて
突然、島だったときのことを思い出す

ああそうだ、ずっと昔わたしは
海に浮かぶ空豆みたいな島だった

懐かしい気持ち
が
体じゅうに湧き上がってきて
どこからか
海鳥の声が聞こえてくる

ほら、
繰り返す波の音
きらきら光る水平線
ここだ、ここだ、ここにいる
じつとしたまま動かない
何千年、何万年
気の遠くなるような時間の中で
うつらうつらと夢見るように
島のわたしが呼んでいる

◆ 《LA VIE EN ROSE》

にしもとめぐみ

あなたの腕の中にと
Hereux, heureux à mourir
満ち足りた時間が過ぎてゆく

親鳥に守られている
雛のように
無心でいられる

公園で遊ぶ
幼子のように
駆け出していける

眠っている間に 夢みてる間に
時は はかなく過ぎてゆく

桜んぼの実る頃 あなたと歩く
聴こえてくるだろう
懐かしい歌

longtemps longtemps longtemps
après que les poètes ont disparus
leurs chansons courent encore dans les rues

愛の国では歌いつがれる
Moulin rougeは回るよ 回る
いつまでも いつまでも愛していると……。

《LA VIE EN ROSE》「薔薇色の人生」 エディット・ピアフ
Hereux, heureux à mourir ウールーウール ア ムーリール 幸せで 幸せで死にそう
《Il est trop tard》 George Moustaki 「時は過ぎてゆく」 ジョルジュ・ムスタキ
《L'ame des poètes》 Charles Trenet 「詩人の魂」 シャルル・トレネ
longtemps longtemps longtemps ロンタン ロンタンロンタン
après que les poètes ont disparus アプレ ク レ ポエート ディスパルー
leurs chansons courent encore dans les rue ルール シャンソン クール タンコール ダン レ ルー
ずっとずっと長い間 詩人たちが亡くなった後も彼らの歌は巷に流れる
《Moulin rouge》赤い風車「ムーランルージュの唄」より

◆ ぐみ

月村香

なぜその美しきひとおつを捨て
山姥が詩を拾いに行つたか
なぜその笑んだくしゃくしゃが
やがてただの紙屑として拾われ
なぜわたしが自分をバカと言つ
友がそれを泣いて怒り
わたしがその友を最初持つては
なぜ探しに行つたりしたか
実に愚かしい
わたしのの中のぐみの中の毒たち

たら
いたが

生活の疲れを最もよく癒すもの
しかし明日も六時には起きる男
持つものは ぐみ
女を救うぐみの毒
何をやっているんだ 遅くに
階下まで落ちて
相当ひどいよね 近頃
なぐさめられたいとか夢の中と
友とかスーパースターとか
ポンコツのPCでアイドルの動画
いらいらしてはいけない
ぐみの実を握りしめて
あなたの眠る時間が
お姫様の通路を汚さぬよう

か
か
が見れない

を終え
たちの

◆花と電車

田村周平

街路樹が
葉を落としてはじめた
日差しはあたたかく
楠の下に咲いている
花をつんで
ビールグラスに
ブーケを作った
花のある部屋は凜として
乱雑な生活用品は
眼には見えない
まるで別の時間を
遊んでいるような

けれどぼくは
電車に乗って出かける
進行方向に背を向けて
過ぎていく風景を見ている
駅につくまでの小一時間が
みるみる過去の出来事になる
まるでなかった時間のように
そんなふうに生きてきたのかもしれない
過ぎた時をいくつしむのは
二千年前から
日本文学の伝統なのに
ぼくはいつも
小さい時間さえ思い起こせない
今日もまた
電車に乗った一時間を
失ったまま
花のある部屋に帰っていく

◆地平の寝覚め——みとろ荘にて

高谷和幸

ひめくりをめくる。旅館の猫は古い樹海のおも
とに立つ丘に「さんさろ」湯の温かみになずん
で近づきいつもの毎日が遠ざかっていく。「素足
のひたひたとスリッパの音。ひととひとのひし
めきが空間の深度の倫理を侵犯してしまう恐れ
を隠し、巣ごもりの解除された世界のヒソヒソ
話をしながら早朝の田の中の一本道を歩んでい
た猫たちには住みやすい地平だと思われた。「さ
かしめ」の四つ足の跡が昨夜から動かない車両
の下に残っていて、息吹き続けた風向きが小さ
な輪の箒で草くずと目に見えない虫たちを古い
国境みたいな模様に擬えていた。朽ちた葉に保
存された記憶や死んだ虫に残る生気がうやうや
しく彼女に眺めさせている。同時に雲のなかに
とらえられて、巨人の軍隊の側を歩む侏儒の兵
が夢を見ているのが、彼女の夢であったことも、
ここでは吹き寄せられた「しね糸」が客間の地
平に溜まるように不可能ではない。何年も昔の
古い夢を見るお告げが、今になって選ぶべき道
筋を正しく理解するような、山のディスタンス
だ。大きなあくびを一つ見せて、イオンを帯び。

◆夢の続き

前田雅正

この頃目を覚ますとどこにいるのかわからないこと
が多くなった。
そこが暗ければ、寝ている部屋の暗闇で目を覚まし
たのかと思う。
時にはベッドの上でテレビをつけたまま眠ってしま
い、目が覚めて画面を眺めながら夢の世界か現の世界
かしばらくわからず、ぼんやりした頭でどちらでもな
いことに気が付くこともある。
今日は大倉山の図書館でうたた寝から目覚めて、ど
こにいるのかわからなかった。あるいは図書館の閲覧
室だと思つてそつと目を開けるとあの世にいることに
気づく日が来るのかもしれない。
それとも梅雨の盛りなのに嘘みたいに青く青く晴れ
上がった、ゴッホの空をポカンと眺めているここは天
上なのだろうか。

◆わけなく

大橋愛由等

差延の果ての異端尋問の内緒話には
（あからさまなまなざしがワタシを無援して）つまづきの路に
迷ったあげく昨日しるしをつけておいた街路樹からため息に酷似
した樹液が垂れてきているのをそっと教えてくれたのはきみだつ
たかきみたちだったのかその唇はきつと短母音だけを発語しすぎ
たせいなのだろう肉厚になっていたのを見逃さなかつたけれど心
の奥底にひそむ種子がカラカラと鳴っていたのが分かつていたの
で「ああようやく蝶の旅支度ができた頃なんだ」とつぶやいてい
た。（あからさまなまなざしが無夢な午睡に浸っていた石を覚醒
させて）ワタシは何日も繰り返して反都市の仮面をかぶつたままの
だれもない街路を行ったり来たりただひたすら歩きつづけてい
たところ出会ったのはビルのすき間から駆け抜けてきた異類婚ば
かり語りつづける微風であつたが言葉をかわすことなくラララと
歩いていたところ蔭を真似して顕れたのが雌雄同株な詩人であつ
て永遠を円卓の上でころがしては気ままに頌歌をうたつて毎晩寝
台で添い寝しているのを羨ましく思わないわけはないけれどせめ
て永遠が乾かないように極水をどれほど注げばいいのか教えても
らおうと思っている。（あからさまなまなざしのため月は気孔を
無垢なまま半泣きで閉じてしまい）父と母の出自が樹液を指し
て集まる声たちの口誦歌で伝えられていると知つたワタシは計測
器をもちだし街路樹のアポリアをひとつずつ測りながら手帖に記
述しては口誦歌を聞き取ろうと待ち構えているうちに父のバスク
帽を取りに帰ろうと実家に向かつたのはいいもののいつまでたつ
ても実家にたどりつくことができずに深更も味爽も歩いてばかり
いるのだけ。

◆兆しへ進む

大西隆志

メキシコの空瓶と
ドイツの空瓶の音
自電車の前カゴで
泡を噴いたビール
が飛び出していく
急ぐのは手旗信号
自粛生活の友人は
徒歩で山と海の間
ひらひらと言葉を
蒐集しながら祓う
闇を積む先の場所

世界は斑に満ちて
毛糸を纏つた街角
森の思想が隠れて
港街の音響も消え
南の風が額を撫で
ジャングルの地代
穴蔵に滲む酒精に
酔は行間に印され
唐揚げの皿は浮く
黙っている背中に
言葉が纏いつくか

兆しに沈み込むな
黙っていることは
蝉殻を踏みしめて
桜散る廊下を進め
廃墟の巡りは何処
しらされない先へ
鳴く鹿のいない坂
どくだみの白い花
に囲まれた屋敷へ
一日の締めめ句点
網戸にぶつかる音

神戸詞あしび

141-2020.06.28 大橋愛由等

緊急事態宣言が出ている最中もわたしはほぼ毎日自宅を出て電車に乗りでかけていた。先頭車両にはだいたい12名ほどしか乗っていない。新緑の美しさを日々増していく六甲連山を車窓の楽しみとしてステイホームどころではない毎日を過ごしていた。

とはいっても都心の神戸・三宮に滞在していたのは夕方までだった。ゴールデンウィークの最中、いちど夜のサンキタ通りを歩いてみたことがある。そこは三宮の繁華街のひとつである。私の前後に人がいない。ゴーストタウンである。いやこの光景、既視感がある。そう、阪神・淡路大震災の時もこうだった。あの時は街全体が崩壊していて、サンキタ通りのアーケードはぐんにゅりと曲がり、電気が消えて昼間いた工事関係者も歩いていなかった。25年たつてふたたび神戸は厄介に見舞われたことになる。

1995年の震災のときは父がまだ元気で、わたしたちが経営する事業体の再建にむけて父が前面にたつて立ち働いていた。その後ろ姿をみていたのが私だった。そして四半世紀がすぎ、父は旅立ち、こんどは息子である私が事業体の再建に向けて立ち働く立場になった。私の息子がその傍らにいますという同じ光景が繰り返されている。

郊外から都心に向かう電車は、乗降客が激減しているのにもかかわらず間引き運転することなく、定時運行されていた。また警察や自治体が「不要不急の外出」を自粛するよう住民に呼びかけていることを横目に、わたしは三宮、元町、神戸周辺で申請業務など仕事をこなすためによく歩いた。五月の街は気候がよくいくら歩いても快楽で街の光景を見るのに飽きることはなかった。

元来、都市はヒト・モノ・コトがつねに流入・流出してこそ、その生命が保たれる。特にさまざまな交通機関が集まる都心の三宮は、ヒト・モノ・コトの流入・流出が多くな



神戸市東灘区で毎年5月に行われるだんじり巡航の中止を知らせる張り紙

過ぎさる季節を惜しむな かれすべての花々よ

れば機能しないのである。その都市の生命線である移動が自粛され、府県境をまたぐ移動も自粛の対象となつてしまったので、桜や藤、牡丹の名所、そして各地でみられた新緑も訪れる人もすくなく、かえってそんな年だから花たちの美麗さがかわだつていたのではないかと思ってしまう。

四月のはじめ、わたしは、密かにという表現がぴったりなのだが、王子動物園に花見に行くことにした。例年なら座る場所を確保するのが困難なほど混雑しているのだが、今年は訪れる人が少ない。しかもブルーシートをひろげるグループもない。どうも地面に座って花を愛でるといふ雰囲気ではない。仕方ないので、白熊がみえる場所のベンチに座り、足速に過ぎていく来館者を横目にみてビールを飲み、サンドイッチを食べ、同行者と短詩を交歓しあつた(文房具店に短冊が売ってなかったので、色紙を購入して、そこに作品を書き込むことにした)。冒頭最初にわたしが作つたのは「四月の裂け目から／猩猩のまぶしそうな／まなざしがほの見え／直立にこだわる／西風のはれやかな／がみがぼくたちを／包みこもうとしてい

る」。詩華交歓は三往復された。三番目の詩は「麒麟がついばんでいた／実在のコアにはタニシが／群れなして群唱している／ようだがいに今日の／花言葉をそらんじて／みては姫の薄幸を／かぞえていたのだった」これに対する応答詩は「我々という動物園から／黒い舌を長く突き出し／季節から芽生いた時間を／食もうとする／貪欲である世紀の／貪欲である生きる地の者たちよ」。

花々たちはめでられることもなく、惜しむ声も小さく、散つていった。いまは梅雨の季節となり、雨が蕭々と降り、紫陽花がひとびとから振り向かれることを希んでいる。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.152
神戸

2020年06月28日 通巻152号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)
maroad66454@gmail.com
定価 600円(税別)